

2013年6月

篠原 肇

2013年10月からイギリスの University of Cambridge, Cavendish Laboratory, Department of Physics , Jesus Collage に進学予定の篠原肇です。私は慶應義塾大学で修士号を取得したのちに渡英します。留学準備から現在までの状況及び今後についてレポートします。

志望動機

元来、「将来は世界の第一線で戦いたい」という目標を持っており、世界トップレベルの大学で経験を積み人脈を構築することがこの目標に最も近いと考えていた。

学部4年生だった2年前、学部卒業後、アメリカのトップスクールの進学をしようと試み、試験などの準備し出願をした。結果的にトップスクールの博士課程から合格をもらったものの、リーマンショック後の不景気も影響し、TA や RA などの奨学金が取れず、年間数百万円という非現実的な額を提示されたため、その時点ではトップスクールへの進学を辞退した。また当時は、「日本の財団からの奨学金は限られた天才しか獲得できない」と思い込んでいたため、日本の財団からの奨学金は端から諦め、出願しなかった。結果として修士課程は慶應の大学院で送ることになった。博士では必ず世界のトップスクールに進学しようと心に決めた。

この直後、2011年3月11日の東日本大震災の影響で原子力発電所が破壊され電力不足のために開始された計画停電により、突然電気が消えた際に何もやる気がなくなった経験から、エネルギーの重大さを確認し、将来はエネルギーの分野で世の中にエネルギーインフラの普及や構築に貢献していきたいと考えるようになった。

出願プロセスから進路決定

アメリカの大学院では基本的に修士課程と博士課程は別のもので、修士号を取得していたとしても博士課程へは入りなおしであるため年限が平均6年であるのに対し、ヨーロッパは日本の大学院と同様に修士課程後に博士課程があるため、修士課程後に博士課程に入ることができ、平均3年ほどと比較的短く若くして博士を取得できる点に惹かれ、ヨーロッパの大学院を目指すようになった博士課程での研究の際に論文に関連したページを見ていた際、ケンブリッジ大学で電池の物質の研究をしているグループが PhD 学生を募集しているというページを発見し、すぐに募集をしている先生にメールを送り、連絡を取り合うようになった。

その後学内の国際学会参加向けの研究助成金(KLL)を獲得し、2012年3月にボストンで行われたアメリカ物理学会(APS)へ参加した際、その先生も参加しているということで実際に会って話した。ここで30分ほど話したのちに出願要請と握手を求められ”内々定”をいただいた。学会がボストンで行われていることを生かし、あらかじめメールで連絡を取っていた他大の先生とも面接をし、”内々定”をいただいた。「一度短期間で来て研究をしてみないか」という話になり、夏にケンブリッジ大学で研究をしてみようと思い、海外での研究活動を支援していただける研究助成金を学内外より探した。

2012年7月から9月にインターナショナルトレーニングプログラム(日本学術振興会, ITP プログラム)より支援を受け、ケンブリッジ大学キャベンディッシュ研究所でインターンシップとして研究を行った。ITP プログラムは海外での研究をサポートしていただけるプログラムだが、大学のパートナー校への派遣という条件があった。当初ケンブリッジ大学はパートナー校に入っていなかったが、プログラム責任者と交渉し、ケンブリッジ大学をパートナー校へ加えていただき、正式に支援を受けることができる状態にした後に出願し、採択いただいた。2ヶ月間実験を中心にインターン生として活動し、日本の奨学財団への推薦状をお願いし、国際便で日本の財団へ送っていただいた。インターンシップが終了し帰国する直前に先生に来年度から正式な博士学生としてのケンブリッジ大学への推薦状をお願いし、先生に志望理由書の添削をしてもらいつつ研究所内でオンライン出願をした。9月の下旬に出願し、10月の上旬には正式な合格通知が来た。

日本の留学向け奨学財団の面接の際には既にケンブリッジ大学の合格証を手にしていたため、合格証を参考資料として提出した状態で面接を受けたところ、好印象を多く残すことができ、結果的に複数の財団から内定をいただいた。最終的に最も条件や体制の良い船井情報科学振興財団の Funai Overseas Scholarship (FOS)の需給を決めた。奨学財団から内定をいただいたタイミングでケンブリッジ大学への進学が確実となったため、内々定をいただいていた他校はお詫びのメールを送り進学を辞退した。

インターンシップ中に複数の先生とプログラム責任者から出願を薦められ、ケンブリッジ大学の先生方に推薦状をお願いし、応募したケンブリッジ大学のエネルギー系の産学連携研究プログラム(学費免除・生活費支給)である Winton Program for Physics and Sustainability 日本人として歴代史上初として採用された。結果的には日本からの奨学金がないと絶望的と言われているイギリスの大学へも、イギリスからの奨学金を獲得することで可能であることが示された。FOS では他の奨学金との同時期の重複は認められていないため、Winton Program の奨学金は FOS 受給中にはいただかずプログラムのメンバーとして活動する合意した。

進学までの期間

進学までの期間を何となく過ごすのではなく、自分の糧にしようと思い、経験を積める機会を探した。博士号を取得しているポストドクとは違い、修士卒博士前のポジションはなかなか無く、探すのに非常に苦労した。世界中の企業や大学の Post Master Category や Internship, 場合によってはポストドクのポジションへの応募など計 30 個ほど応募した。強引に募集後にオファーを受けた際も「大学の規定で正規の学生でないと受け入れをしていない」や「アメリカ国籍でないと受け入れない」など、規則に引っかかり破談となった例もあった。最終的に、ドイツの大学に在籍している人向けのインターンシップを持っていたドイツのボン大学(Universität Bonn)のインターンシップ担当者にメールを送り相談し、興味のある研究をしている教授に取り次いでもらい教授と直接交渉し、特別に受け入れ許可をいただいた。この間、運よくドイツ政府の奨学金であるドイツ学術交流会奨学金(DAAD)を獲得した。負けず嫌いな私は「せっかくドイツ語圏に行くのにドイツ語で買い物が出来ないだなんて悔しいな。」と思い、第 2、第 3 外国語はそれぞれフランス語、スペイン語に取り組んでいたもので、ドイツ語は初めてだったものの、渡独前にドイツ語を話せるように練習し、日常会話は何とか話せるようにした。

今後の目標

今後はケンブリッジ大学での研究や Winton Program での活動を通して物性やエネルギー分野での経験を積み、そこで人脈を培いつつ今後の方向をより具体的に考えていきたい。将来は 2088 年 7 月 26 日に未来の Google のようなサイトにおいて”Hajime Shinohara, 100th Anniversary!”と讃えられるような人物になれるよう出来る限りを尽くして貢献していきたい。

経歴

一見、私の経歴を見ると、様々な団体から表彰され、大学院の出願もケンブリッジ大学に単願で行い、複数の財団から奨学金付きで合格するなど、順風満帆な印象を受けるかもしれない。しかし決してそう順風満帆ではなかった。小学校中学校ではいじめられたこともあり、高校は志望校に不合格、大学でも第一志望には入学できなかった。さらに大学院では合格こそしたものの、ピンポイントに起きた世界的財政難に苛まれ進学を辞退した。運の要素はかなりあると思うが、それでも目標を見失わずにおかれた状況で頑張り、時には交渉をしつつ、半ば規則を曲げてでも特例を認めてもらえるように出来る限りの行動した結果でもあると、渦中の私は思いたい。